

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十八年十一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十二巻第七号（通巻第一五二号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第151号

11. 2006

文化の日

品川 鈴子

外遊を箸派でとほす文化の日

ともすれば拗ねる人形文化の日

おんぶにて臥牛像撫で七五三

薄紅葉式部の被衣かつぎさながらに



小浜線式部も花野分け入りし
一山の最たる紅葉勅使門
笛塚を覆ひて雨の散紅葉
もつれごと故郷の月も目に入らず
禅の庭紅葉の放下隈なくて
寮の径一筋禿げし草紅葉



玉 鈴

兵庫 山口庸子

姫を舞ふ太夫の手は日焼けして
数分を違へて出合ふ蛇二匹
浴衣着てバイクで走る若者ら
パソコンで代行頼む墓参り

神奈川 山崎辰見

旅靴預け踊の輪に入れり
ふとかざす手にも踊のしぐさかな
アルプスと白を競へり雲の峰
角笛は雲の峰より聞え来し
風鈴にせむとカウベル振つてみる

香川 合川月林子

玄関の鍵とりかへる残暑中
新しき碑が増ゆ寺や残暑中
取組みがすみ一勢に秋扇
遊び場に筵残して地蔵盆
研ぎたての銘もて割りし大南瓜

吟

大阪 赤木真理

女とて酒友を持ちぬ菊脛
本棚に洋酒を並べ星月夜
男爵と犬に名づけて西郷忌
鳥兜うはさ話に加はらず
電卓を叩ひてばかり年の暮

兵庫 秋田直己

塾前に自転車並ぶ夏休み
マンションの下に西日の観覧車
水泳に段位授ける水練校
自治会へ差し入れらるる冷し酒
祇園会の腰に差したる子等の笛

愛媛 足利罇子

手火花にかがみて十の爪赤し
睡蓮の開くやワイングラスめき
扇風機机ふまえて廻りおり
玄関の百合の香奥の座敷まで

愛媛 足利 徹

葛の花送電塔にのぼりたる
棚経の僧に携帯電話鳴る
墓参り先頭は大葉罐持ち
ハワイアンギターに更けて星月夜
稲妻の割り込んでくるテレビジョン

大阪 尼寄太一郎

夏草の戦ぐ誓子の隣り墓地
遊船に熾す七輪大堰川
クレヨン画真つ赤に遊戯室の夏
曲るたび瀬音あらたや瀧の道

兵庫 荒木 治代

籠りみて梅雨の軒裏見飽きたり
梅雨の戸を堅く閉ざして長期留守
長梅雨に工事再開ままならず
接骨院ぎこぎこ回る扇風機
胃におとす苦き丸葉原爆忌

大阪 池田かよ

心経のとちり乍らに初盆会
門火焚くみたま還るを疑はず
まこと顔控へる胡瓜茄子の馬
盆の月空の落書めく雲に
送り火の煙ひとすじ天界へ

大阪 石橋 萬里

潮風に褪せしヨットの星条旗
土用灸すゑて遠出に備へけり
引越しの金魚を囲ふ保冷剤
花火師の小指失ふ火傷痕
子ら帰り風呂に漂ふ浮人形

東京 市橋 章子

西空の赤き半月原爆忌
天辺のクレールンお辞儀す大西日
汗どつと正座能はぬ膝隠す
蜘蛛の囲に賽銭錆びて山深し
とんばうの横つ飛びにて草移る

薬草歳時記

(二五〇) 木賊(トクサ)

須賀悦子

谷水を踏まへて刈りし木賊かな 高浜 虚子

木賊は茶庭の蹲踞の傍などの水辺にあつて情緒風情のあるものと見ておりましたが、この薬草歳時記に取り上げることになつて初めて昔からの有用な薬草と知り早速我が狭庭にも植えつけてみました。一箇所に纏めて植えましたのに習年にはその周りのあちこちに芽が噴き出してはどんどん増えて行きます。地面近くで地下茎が横走し短く分枝しその節から茎を直立してゆくのは同じ「トクサ属」(とくさ科)の杉菜と似ています。この地上茎は中空の円柱形で分枝せず深緑色、表面に八・二十の溝が縦に走り高さ六十センチ〜一メートルになります。

生きるみち変えて十年青木賊 嶋野葭生子

木賊は表皮に硅酸塩を含み粗硬なため温湯で煮た茎を乾燥させ砥石の代用に木材、骨、角などの工芸品の研磨に使

い、また歯石の除去、爪の整形、イボ胼胝の削除などにも使われていたそうです。収斂作用があるので民間薬に止血の目的で腸出血、痔出血、月経過多などに、また煎汁でカスミ眼、涙目、結膜炎の洗眼に温罨法にすれば良いと謂われています。

夏、茎頂に土筆のような胞子囊の穂を生じ、節には黒色の鞘状葉を付けます。六、七月頃茎を根元から刈り採り熱湯に浸した後日干しにしたものを薬用としますが、秋の終わりごろこれを刈り取り物を磨く粉を作るので、「木賊刈り」は晩秋の季語となっております。

木賊は「砥草」とも書きますが、別名に「やすりくさ」「つめとぎ」「はぶらし」「つきぐさ」「つくし」など砥ぐことに由来したものが多くあります。

人の世に木賊も蘆も刈らで老ゆ 相生垣瓜人

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」 北隆館

大塚敬節「漢方と民間薬百科」主婦の友社

「世界大百科事典」 平凡社

著者略歴 神戸薬科人学卒

トクサ〔トクサ属〕(とくさ科)

Equisetum hyemale L.

木賊

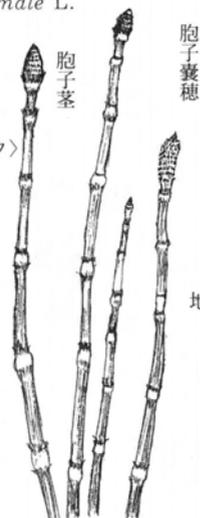
薬用部分：茎
木賊〈モクゾク〉

須賀悦子画



地上茎断面

6月初旬画



孢子囊穂

孢子茎



地下茎断面

地下茎



10月中旬画

栄養茎

E.S.

もの云はぬ男なりけり木賊刈る	大島 蓼太
秋風のさゝらにもする木賊かな	馬場 存義
木賊原小学校のありにけり	富安 風生
刈りきし木賊枯るるにまして剛まる日々	中村草田男
青木賊都踊は音洩らさず	波多野爽波
ゆうまぐれ蠅きらくと木賊道	三谷 昭
水音生むしぐれ気配の木賊の辺	金子無患子
木賊の秋踏めば地しめりひかり生む	大野 林火
木賊刈大日輪の申し子ぞ	平畑 静塔
緑濃き木賊で爪を磨くなり	武智 恭子

ぐらつひ

鈴の奏

品川鈴子選

雲海にお国自慢の山浮かぶ 兵庫 国永 靖子

雷鳴の真只中や薬師岳

お花畑黒部源流ひと跨ぎ

青嶺越え三角点を撫でしのみ

死有の汗拭きて大息返さるる 兵庫 岩木 眞澄

白桃の汁を一匙病む友に

桃の香の残る唇たむけ水

朝顔と犬に水やる通夜の客

ピカドンの盆語りつぐ瀬戸の島 大阪 弓場 赤松

終戦日の跡形もなき大都会

夕焼けに人犬老いしニュータウン

織姫が覗く夜更けの観覧車

帰省せし姉妹マスカラたつぷりと 香川 島内 美佳

林間校慣れぬ手つきで米をとぐ

子等巢立ち二人で眺む遠花火

体験者二割となりて終戦日

富士山の泥玄関に登山靴 神奈川 永塚 尚代

邂逅を祝すビールに膝くずし

尾根道の霧を出てまた霧に入る

蚊喰鳥幼時の町の昏かりし

炎昼の鴉くちばし刃物色 兵庫 高橋 大三

鉢合せして飛びすさる吾と蜥蜴

寮母へと髭の帰省子土産を

夏休み小学校に健診車

目に耳に腹に心に揚花火 香川 大空 純子

日の盛り重機の壊すビルの音

霊山に耳痛きほど蝉時雨

海は無く流れ着くまま天の川

原爆忌手話になかりし放射能 兵庫 土屋 利之

蝉の穴嬰みな指を入れたがる

草いきれ武装解除に空水筒

稲穂噛みうなづき合うて田面見る

下積みの沈黙破り蝉は鳴く 大阪 久下 眞一

長竿で徒渡りをり夏の釣

秀 鈴 記

巻頭三句 品川鈴子 評
四句〜十五句 馬越幸子 //

*選句は全て 品川 鈴子

お花畑黒部源流ひと跨ぎ

国永 靖子

織姫が覗く夜更けの観覧車

弓場 赤松

高山植物の咲き乱れるお花畑に辿りつけば、山登りの苦
勞も忘れる爽快感。そこは富山と長野の県境をなす鷲羽岳
(二九二四メートル)の辺り、ほんの一跨ぎほどの清流が
あり、このせせらぎこそ黒部川の源とか。やがて北の富山
湾へ注ぎ、全長八五キロに及ぶ奇勝の黒部峡谷には、急流
を利用して黒四ダムのような発電所が多く、数ある温泉も
宇奈月などが有名。

死有の汗拭きて大息返さるる

岩木 眞澄

ひとくち食べた桃の汁が、末期の唇にまだ香りを留めて
いる。親しい人のさまよう幽明の境に立ち合つて、死者の
靈に水をたむけて、湿す唇に桃の香りがして、ふと動くよ
うな気さえる。生と死はまこと紙一重だと知る。

死有とは四有の一つで、衆生が寿命尽きて、まさに死の
うとする刹那を仏教でそう呼ぶ

牽牛と織姫星が七夕には烏鵲かみきぎの橋を渡つて出会う。その
帰りがけの夜更けに、下界を覗いた織姫は、見たこともな
い珍しい眺めに驚いた。電飾の巨大な輪・観覧車がゆつく
り動きながら聳えているではないか。世も変わったものだ
と溜息をつき、来年の逢瀬の話題にするのでしょうか。

子等巢立ち二人で眺む遠花火

島内 美佳

夫婦の来し方は子育てとともにあった。次々と揚がる花
火は生まれてから成人するまでの思い出のフィルムを早送
りしている様である。花火は遠くで活躍している子供たち
のようです。

富士山の泥玄関に登山靴

永塚 尚代

この句の眼目は泥、それもそんじよそこらの泥ではなく、

靈峰富士に登った靴に付いて来た泥である。俳句は断定の詩であると言いますが、まさに正攻法のすつきりとした、しかも広がりのある佳い御句だと思えます。

夏休み小学校に健診車

高橋 大三

夏休みでからつぽの小学校に地区住民の為の集団検診車が来た。それも大人ばかり、大多数は中高年である。作者もその内の一人か、取り合わせが面白い。声を出して読んでみればこの句の良さが分かります。

日の盛り重機の壊すビルの音

大空 純子

神戸も震災後、いたる所で傾いたビルを壊す光景を見ました。鉄球をぶつけて大まかにコンクリートを割る方法も見ましたが、今は蟹の爪のような物でむしり取る方法が主流のようです。作者は壊されるビルに同化して悲鳴を聞いているのでしょうか。その悲鳴を上五の日の盛りで表して。

稲穂囓みうなづき合うて田面見る

土屋 利之

今年も長梅雨で日照不足が心配されましたが、八月に入

ると猛暑が続き花も順調に咲き、穂が出ました。恐る恐る囓んでみて実が入っているのを確認した。今年も平年並みかそれ以上だろう。

夫婦で育てた稲が実った瞬間をとらえた、静かな佳句。

長竿で徒渡りをり夏の釣

久下 眞一

溪流釣の様子。ポイントを探してあつちへ行ったり、こちへ来たり、いかにして魚を騙すか、徒渡り出来るのも夏なればこそ、釣果を期待しています。

刻々と屋根の沈むや暴れ梅雨

原田 圭子

淡々と屋根が沈んで行く様子を詠んでいて、不気味さが際立って来る。生きている限り目にしたものは、句にしてしまう俳人の性、御無事で何よりでした。(以下略)